

浣腸凌辱



浣腸凌辱

キンク文庫

文庫本（40字×17行）

183ページ

第1章 絵美

電車の中が混雑することは分かっていたが、その日はどういう訳か、朝早く起きて○リーブコーヒーが飲みたかった。そして遠藤絵美に出会ったのは、金沢文庫から横浜駅に向かう○急線の中だった。

通勤とは無縁の生活を送る信一は、朝の満員電車のことは頭になかったというか、すっかり忘れていたようだ。

上大岡駅でさらに大量の乗客が入ってきた。既に満杯なのに駅員の1人が入り口のドアの外からぎゅーぎゅーと押してくる。電車内でつり革を両手で握って立っていた信一、それでも隣の人の肘やらが信一の身体の至る所に当たってくる。

「いたたた……」

後ろのサラリーマン風の男が肘で信一の腰あたりを押し込んだ。その男の顔をチラッと睨みつけるように振り返り、その手を退けてもらうように催促した。しばらくすると男の手は信一の後ろから離れた。

「ふう〜」

電車が上大岡を発車した。

車両内に少しスペースの余裕ができた気がする。それでも立ち位置を変えられないくらい混雑している。

しばらくして左隣の女性の匂いが気になった。化粧とか香水のキツイ匂いというのではなくて、何とも風格のあるイイ匂いが気になったのだ。

スカートスーツ姿の20代後半くらいの綺麗なタイプ。横から見た感じだと、少し前までNOKの夕方7時からのニュースをメインで担当していた女子アナに似ている。髪の毛は後ろでくくっていて、首筋あたりが思わず息を吹きかけたくなるほど色っぽい。

グレーのシンプルなスカートスーツ姿がよく似合っている。スカートの丈もそれほど短くしてる訳でもなく、スカートの下から覗く薄肌色のストッキングの脚もそれほど細いという訳ではない。つまりは体型はごく普通だが、まじめで清楚な感じのOLさんという感じだ。

何かこう堅いイメージというか、仕事の予定を考え込んでいるような表情をしたまま窓の外をぼーっと眺めている。そしてこういう見た目の女性に限って、心の中ではいろんな妄想を膨らませセックスの時になるとそのイメージを打ち壊すかのような激しいセックスをすることが多い、と自分に都合のいい妄想をしていた。

お金のためにウェブカメラの前で平気で脱ぐ女どもを飽きるほど見ている信一にとって、その女性の立ち姿はかなり新鮮に映った。

「すう〜」

ちようど鼻から数センチくらい先に彼女の頭というか髪の毛があつたので、思わず吸い込んでしまった。もっと高級な匂いがあるのかと思っていたら、自分らが使うような安物のシャンプーの匂いがしてますます気に入ってしまった。

晩秋にしては少し暑い蒸い満員電車の中で、こんな綺麗で賢そうな女性の髪の毛の匂いを思いっきり吸えるのも、何故か急に飲みたくなってしまった。○リーズコーヒート、いつも利用させてもらっている○浜急行のおかげだと感謝せずにはいられなかった。

彼女は気付いているのかいないのか、さっきから窓の外に見える横浜市内にしては田園的な風景をしばらく眺めていた。きっと何か大事な打ち合わせとか、午前中にあつたりするのかもしれない。

化粧は薄くは塗ってはいるけれども口紅はしていないようだ。横から見るといかにも家柄の良さそうな格好の良い鼻をしている。口元はしっかりと閉じられていて下唇が若干大きい。掘りの深い顔立ちではあるが、何とも色気のある口元が、それらをすべて女らしさに変換しているようなそんなあたたかい感じの唇だ。

横からだとその瞳の感じは判りにくい。目は少し切れ長である。仕事柄なのか眉毛は薄めのグレーをかなり強く入れていて、実際にはどうなのか知らないが気が強そうな印象を持たせる。

彼女の髪の毛の香りにしばし酔いしれていた信一。液晶モニターに映るチャットのニセ女子高生のおマンコを拝むより、何倍も信一の股間を刺激するような匂いだった。

「いい……」

信一は少しずつ自身のペニスが大きく膨らんできていることが判った。そして大きくなると今度はソレが時々、彼女の腰くらいに当たっていることに気付いた。

別にこういう時のためという訳ではないが、信一は好んでポリエステルとかの生地がツルツルのパンツを履くことが多い。例えば今日のスラックスの下にそんなパンツを履くと、スラックス越しに亀頭の敏感な部分が刺激されて気持ちがいいのだ。

満員電車で後ろを度々押されて彼女に寄りかかるといふことも相乗して、信一のペニスは段々と大きくなっていった。

大きくなればなるほど亀頭を擦る頻度も増え、しまいにはほとんどずっと当たっている状態になった。

もはやフル勃起の状態で、おそらくペニスの形が座っている乗客からは判ってしまうというくらい勃起していた。ただ、満員だったのでその心配はしないで済んだ。

ギンギンに硬くなったペニスの先っぽが、彼女の腰辺りをツンツンと突いていた。

「うん……？」

最初は、誰かが指先でツツしていると勘違いしたらしく、彼女は後ろを振り返るように

見たのだが誰も知り合いらしき人間はいない。信一がそこに立っているだけだった。

彼女は「誰だろう？」と思ったに違いない。「ひよっとしたら痴漢？」と考えたかもしれない。

信一は、釣つり革を持つ手を、わざとギユウギユウという音を出しながら持ち替えた。両手でつり革を掴んでいて自分はそんな痴漢なんか出来る状態ではない、ということをお女にアピールしたつもりだった。

がしかし、下の「手」の方はそんな理性ではなくて本能で反応してしまっていた。

電車が揺れば揺れるほど彼女の腰のあたりいや、もはやペニスの先つちよは彼女の尻の上の部分に狙いを定めてしまっていた。

「あうっ……ううう」

電車の揺れに合わせて腰を振る信一。

時にはギユウっとペニスが痛いくらいに彼女の尻の上の少し硬い部分に押し付けて。時にはチロチロっと亀頭の裏筋が僅かに擦れるように――。

しかしそのうち彼女がその行為に気付いたようだ。

最初は何か生温かいふにやふにやしたモノが当たるなあという感じで、斜め後ろを覗くように見ていた彼女だったが、横に立っていた信一がいつの間にか少し後ろ側に移動したことを疑問に思ったのか、後ろを振り向いて信一の顔をちゃんと見たのだ。

「まさかこの人私のこと痴漢してる？」 そう思ったような感じの顔。

信一は「まずい」と思った。両手はつり革を握っているにしても「下の手」で尻を触ることもやはり痴漢には違いないからだ。

「……」

信一の顔をじーっと見つめる彼女の瞳に、信一はさすがに目を合わせられなかった。

何か言われることも怖かったし、自分の行為自体も恥ずかしかった。

しかし彼女はそのまま、さっきと同じ表情で何事もなかったように、体の正面にある車窓の方を向き直したのである。

（なんていい人なんだ！）

信一はますます彼女のことを好きになった。

（もうダメだ、このままイッてしまいたい）

実は彼女に自分の行為を知られたせいで逆に興奮してしまった信一は、こうなったら後の事なんてどうでもいいっ！ このまま出してしまいたいと思った。

「あふう……はあうう」

かっ飛ばしている○急電鉄の中では、信一の喘ぎ声など他の乗客にはぜんぜん聞こえないようである。

そして、グイグイグイツと、亀頭の敏感な部分を強く彼女に押し付けた。

斜め上から見る彼女のうなじと髪の毛のシャンプーの匂い。

「ふうく……はあうう」

堪らなかつた。自分のペニス彼女の尻に強く当たることによって、信一は彼女をバツクから犯している気分になる。

おまけに彼女は一度だけ信一の顔を確認して「別に続けてもいいわよ」という感じで、何事もないような顔をしたのだ。「本当は犯されたいの」と言わんばかりに。

「あううっ」

——信一はやはり果ててしまった。

ドクツドクツと、脈を打っていることが自分でも分かる。パンツの中に出したけど、もしかしたらストラックスの外側にも、臭い液体が染み出してくるかもしれない。

そして——、

「まもなく横浜、横浜です。Ｊ〇線、東急線、相鉄線、市営地下鉄線は——」

電車が着いた。なんていいタイミングなんだろう。上大岡から横浜までの時間を身体が覚えているのかもしれない。

しかし〇リーズコーヒーに行く前にトイレに行つて。パンツの内側に付いた精液をまず拭かなくてはならない。

電車が速度を落とし始めた頃、信一は彼女の顔をもう一度見た。

すると彼女は、

「なんか凄かったわ」

信一の方を見て微笑みかけるようにそう言ったのである。

その夜、信一は2回目を自宅で射精した。

信一は数年前に脱サラし、自宅のマンションに安いサーバーを買ってきてエロチャットサイトを構築した。構築したといってもサーバーは友人の使い古しで、チャットのコードは海外のものを安価で買いそれを日本語に直したものだ。会員制のサイトで、女の子に卑猥なポーズをとらせて視聴する男にシコシコしてもらうというよくあるエロチャットサイトである。

最初の数か月は失業保険を貰いながらサイトの構築に当て、2年目あたりから本格的に宣伝を始めた。女の子には自宅のウェブカメラの前で卑猥なポーズを取ってもらうだけだ。歩合制なので信一の負担も減るし頑張れば頑張っただけ帰ってくるので、サイトで働きたいという女の子の申し込みは多い。

開業して数年後の現在、サイトは軌道に乗りつつある。在籍する女の子は一応40人を超え、平日の昼間ですら4〜5人はサイト上で待機している。オナニーのネタに困った男達のオカズになるべく、女の子たちはカメラの前で懸命にアピールする。

無料モードでは乳首やマンコといった部分は露出できなくなっていて、課金される一对一のプライベートチャットモードで客の男の好きなポーズ、場合によってはバイブなどの道具を使うことができる。女の子にとってこのプライベートチャットモードでいかにチャット時間を引き延ばせるかが高収入につながる。

今年初めてある程度の売り上げがあったため、信一は税務署に所得税を納めなくてはならなかった。後々事業拡大も考えているので、面倒だが青色申告でしようと考えていた。そして初めての申告だったので税務署からとある公認会計士を紹介された。

送られてきた紹介状によると、遠藤絵美という女性でこちらから直接その会計士さんに連絡し、都合のいい日時と打ち合わせ場所を決めて下さいと書かれてある。

「なるほど、青色申告の初心者にはこんなサービスがあるんだ……おまけに女会計士さん」
信一はいかにも公認会計士という感じのメガネをかけて釣り目で厳しい感じの中年女を想像した。

「うーむ、ちゃんと領収書を整理しとこう。しっかしやれやれだな……」

大量の領収書が溜まっている箱のほうを見て呟いた。何か月も領収書の整理はしてないし、もちろん申告書の準備なんてまったくしていない。

チャットの運営がやつのことで上手くいきそうで、利益もある程度見込めるようにな

ってきたというのに、さらに税金の申告まで自分でやらなくてはいけない。

「社長つつつても個人事業主の場合あれだな……社長兼ヒラ兼雑用つつーやつか」

ぶつぶつと文句を言いながらも、まあ頭のキレまくる男の会計士なんかよりはマシかと思っていた信一だった。

数週間後。

公認会計士さんの事務所に電話して、はじめての打ち合わせ日程と場所を決めた。

電話してみると意外とというか思ったより若い女性だと思った。信一と同じくらいの年齢かもしかしたら年下かもしれない。でも会計士ということではやはり賢そうで受け答えもしっかりしていた。

——で結局、最初の打ち合わせの場所は信一の自宅のマンションになった。

向こうの事務所に向くこともできたのだが、信一がどういう事業をしているのかを会計士さんの方でも確認したいとのことだった。

正直、女会計士さんにお見せできるような内容の事業ではないが、自分はこれで稼いで生きているのだから胸を張って見せるしかない。

会計士さんとの打ち合わせの日。

ピンポーン。

時間きっかりだ、さすが公認会計士。

「はい、空いてますう」

玄関のドアがなかなか開かないので、自分で玄関に向かう信一。

ドアを開けると、

「えっ……」

信一は驚き絶句した。いや恥ずかしさと嬉しさのあまり絶句したのかもしれない。

「あっ……」

女会計士さんも絶句していた。やはり同じ気持ちだったのかもしれない。

——信一のマンションに来てくれた女会計士さんは、以前、信一が電車内で股間を擦りつけた女性だった。

しばらく2人とも茫然としていた。おまけに2人とも顔は真っ赤だ。

信一は、絵美の尻にチンポを擦りながらオナニーするというほとんど痴漢行為、いや手で触るよりも悪質な行為だったかもしれない、をした相手を前にして申し訳ないというか、でももう一度会えて嬉しいという顔をしている。

一方絵美は、通勤電車内であんなことをされたのは初めてだったけど、公認会計士という堅い職業をしているのだから、最後にあんなことを言わなければよかった、何か自分の

性生活を暴露したみたいで恥ずかしいという顔をしている。

「あのう〜」

信一が最初にその気まずい雰囲気解いた。

「この前は——」

信一がそう言おうとしたとき、

「あっ別に、気にしてないですから」

痴漢として訴えられるんじゃないかと信一が心配してるんじゃないかと思ったようだ。

「はははっ……すみませんでした、本当に」

信一はそう言って頭を下げた。

「ああ、いえいえ」

「でも……」

信一が頭を上げた後に、また何か言い始めた。

「でも？」

それ以上何か？ という感じの絵美。

遠慮がちに絵美のことをチラチラと見ながら信一は、

「会計士さんがとても素敵だったので、つい」

素敵だと思ったのは本当で、ついヤツてしまったのも本当だ。それにああいう行為を電車内でしたのも初めてだ。

「あははっ、それはどうもっ」

かなり照れている様子 of 絵美。

「断じていつもやってる訳ではありませんので」

しつこく言い訳をする信一。

「ああ大丈夫っ、大丈夫ですから」

それ以上言い訳をしないでくれ、と言いたげな絵美だった。

「じゃあどうぞ、ははは」

普段あまりしない作り笑いをする信一。

「あっじゃあ失礼しますね」

履いていたシューズを脱ぐ絵美。会計士さんらしい黒い大人用のシューズだが、小さいリボンがついているのが女らしくてかわいらしい。

シューズを脱ぐ絵美の姿をしばらくじっといやらしい目で眺めていた信一に、絵美は、
「そっ、そんなに見ないでくださいっ」

忠告してるのか本当に恥ずかしいのか、信一には判別がつかなかったが、

「あっ、はははっ……どっどっ、どうぞどうぞ」

信一はそう言い残して部屋の方に慌てて歩いていった。

本当は絵美が靴を揃える時に屈むので、その時に彼女の尻の膨らみを見たかった。射精してしまったアノ時に、自分のチンポを擦っていた尻を確認したかったのだ。

信一のワンルームの部屋に入ると、お互いの名刺交換をした。

「公認会計士の遠藤絵美といいます、よろしく」

「あっ、はいっ……えーと一応チャットサイトの運営をしてる白滝信一といいます。年は30ですっ、はい」

はっ？ という顔をして信一の顔を見つめている絵美。信一が最後に年を言ったことに驚いている様子。

「——あっ、ああ、すいませんっ……ははは」

もうさつきからデレデレとした表情をしっぱなしの信一だった。

「もう——」

明らかに信一が自分に気があると思っただったが、顔には出さなかった。

信一の方も、どう考えても「あなたが好きです」と主張している自分が恥ずかしかった。

(し……しかし、こんな綺麗な女とひがこの部屋に入るのは初めてだな……それにこうやって

近くで見ると……なんかこう——)

信一は、ふらふらぐつと絵美の方に倒れそうになった。あまりに絵美に惚れこんで気絶しそうになったというか気持ち良すぎて悦に入ってしまったのだ。

信一は普段オナニーをするときに同じ現象がたまに起きる。

「えっ……ちよっ、ちよっ！」

いきなり白目を剥いて、その場に崩れそうになった信一を支えるようにして絵美が言う
と、

「——あっ……ああ。すいません……どうも」

あっまたか、という表情をしている信一。

一瞬だけストンツと落ちて、あとはケロツとしていた。

「ははっ、すっすみません、変で」

ぺこりと頭を下げ、信一は何事も無かったかのようにその場に正座した。そしてテーブルの上の書類に目を通していた。

唖然とした表情でその様子を見ていた絵美だったが、やはり気を取り直して、

「では始めましょう」

公認会計士の顔になった。

初心者の自分に一生懸命説明している、かわいらしい絵美の顔を観察しながら、信一はもう彼女の説明など耳に入っていないかった。

(ほんと……近くで見るとあのNOKのアナウンサーそっくりだな……)

(特に微笑んだ時の口元といたら——)

申告書の説明などぜんぜん聞かずに、信一はずっと絵美の口元を見ていた。

(ああ……今日はちゃんと口紅も塗ってるし、色っぽいなあ)

ぼーっと、絵美の口元を眺めている信一に向かって、

「あの〜」

説明している書類の上に顔を滑り込ませて、絵美が信一にそう聞いた。

「あっ……」

信一はハッと驚いた表情をして、

「……ああ、はははっ」

頭を手で掻く信一。

「説明、聞いてました？」

疑いの目で見ると絵美。

「えーっと……まあだいたい」

もちろん全然聞いてなかった。

「あつ、ちよつとコーヒーいれますつ、はいっ」

席を立ててキッチンに向かう信一。一応、初めて会う会計士さんが来るということ、スタバで新しいコーヒー豆を買ってきておいたのだ。

「へえ、コーヒー好きなんですか？」

絵美がキッチンに立っている信一に向かってそう聞いてきた。

「ええまあお茶とかよりは、ですけど……」

「ふん」

「ええ。だいたい豆を買ってきて、自分でいれるようにしています」

「え、すごいっ、それって」

「そっそうですか？」

「ええ。私なんかいつもインスタントですから、ははっ」

「まあだって、会計士さんはお忙しそうだし」

実際、公認会計士という職業はのんびりコーヒーなぞいれる暇など無いのかもしれない。

「まあそうですね……特にこの時期はですけど」

（ホントは「こんなバカな初心者相手もしなくてはいけないし」と言いたいだろうに）

しかし信一は、

「でしようねえ」

コーヒー豆の焦げたいい香りがキッチンから部屋へと漂っていた。信一が手動式のコーヒーミルを使ってコーヒー豆を粉碎しているところだ。

「あーいい匂い」

目を閉じて少し口元を上げ、シャンプーのコマーシャルで髪の毛の長い女性がしそうな表情をする絵美。

(うわっ、なんて色っぽいんだ)

相変わらずの信一。キッチンから見える絵美の座ったスカートスーツ姿もいいなと思っていた。

キッチンからだど、正座している真横からの恰好を見ることが出来る。

胸もそこそこあると思っていたが、腰から尻の肉付きもまあまああって、正座するとその肉がスカート上の布を押すように膨らみ、それが段差となって布の筋を作っている。尻の横から後ろにかけて、尻の肉で少しパンパンになった面にパンティの線がくつきりと映し出されていて、その線から推測するに普通の真面目なパンティを履いてるっぽい。

さらに正座をするとスカートの丈がだいぶ短くなり、今まで座っていた信一の場合からだど、おそらくテーブルの下に顔を入れて見たら彼女のスカートの中が見えるんじゃないかと思った。

そんな妄想を膨らませると、

(彼女のパンティが見たいな)

信一は。パンティの線だけじゃ満足できなかった。

ちよつと顔をテーブルの下に入れたら見えるかもしれない。おまけにあんな堅つ苦しいスカートの中だ、蒸れてテーブルの下はその匂いも漂っているに違いない。

「あのうら、お湯が……」

ピーピーと湧いているヤカンを指差している絵美。

「あつ……ああ、はははっ、すいませんっ」

慌ててコンロの火を消した。

(またしてもぼうーつとしてしまった——彼女はまた俺が何か変態なことを考えてると思っただろう)

信一は、粉碎したコーヒー豆をガラスのサーバーに入れ、さらにヤカンのお湯をそのサーバーに注いだ。

コーヒーが出来る頃に、信一はあるイイ事を思いついた。

(そうだ、彼女にコーヒーをたくさん飲ませよう)

どういう訳かと言うと、こうだ。

コーヒーをたくさん飲んでもらえばオシッコがしたくなるはずだ。そしてトイレに行ってもらうんだが、そこでだ——今日はトイレが壊れたということにしよう。

これは彼女がトイレに行く前に自分がトイレに入って細工をしなくてはならないが、コーヒーを淹れたこの直後にでもトイレに入ってどうにかすればいい。

すると彼女はどうしてもオシッコがしたくなる、でもこの近くに使えそうな公衆トイレなんかある公園はない。

俺はしようがなく、ここの風呂場で排尿することを勧める。まさかお漏らしするよりはマシと、彼女は仕方なく風呂場で用をたす。

曇りガラス越しだが、彼女の排尿姿が拝めるし、音は間違いなく聞くことが出来る。もしかしたらソノ最中に、自分はシッコシッコしてイクことができるかもしれない。

——それでいこう。

コーヒーがサーバーの中で出来ている間に、信一はトイレに入った。即席でどうにかトイレを使えなくしなくてはならない。

トイレ本体を壊す訳にはいかないが、水を出なくすることは簡単だ。

女性ではあれば水の出ないトイレで用を足したくない筈、特に大便のともなると自分の出した臭い糞なんて絶対に残しておきたくないと思う。

(よしっ、水を止めよう)

という訳で信一は、水の入っているタンクの中を開け、一番下のバルブに繋がっている鎖を外した。これでいくら外の排水レバーを引いても水は出ない。

(これで大丈夫)

(いくらなんでもタンクの中を開けてくることはないだろうし)

トイレのドアを開け、中から出た信一は、何事もなかったかのような顔をしてコーヒーの続きを入れた。

しばらくして、

「さあ、どうぞ」

大きめのマグカップに、たっぷりとコーヒーを注いで絵美に出した。

「あー、いい香り」

(たしかにこのコーヒーは特別ブレンドの高いやつだ)

「あくでも、たいした豆じゃないですよ。もし好きならけっこう余ってるんでたくさん飲んでってくださいよ」

「1人じゃ飲みきれないんですよええ」

信一はそう言っておいた。

「えっ、こんなにいい香りの豆なのにな？」

「ええ、コーヒーには目がないんですよ。あつあと、綺麗な女性にも」

「ぶっ！」

絵美は、口にしていたコーヒーを思わず吹いた。

「また変なことを言ってしまったと後悔した信一は、
すっ、すいませんっ」